

第4章 グループインタビュー調査の結果

1 最近の若者の結婚事情について

日 時：平成30年9月28日（金）11：15～12：15

場 所：奈良商工会議所

出席者：なら結婚応援団関係者5名

【1-1 最近の若者の結婚事情】

番号	テーマ	実態
1	将来設計と結婚の関係	婚活イベントでは、何歳までに結婚する、といった将来設計を決めている人は、相手が決まる傾向にある。
2		親の婚活イベントでは、子どもが20歳代だと、親にも焦りが無い。
3		30歳代、40歳代になると、結婚を負担に感じるようになる。
4		結婚の苦労話が強調されすぎている風潮がある。
5		結婚に関する情報が多すぎて決められない。
6		つきあうことに抵抗はないが結婚に進展しない「とりあえずカップル」が多い。
7		20歳前後の若者が抱く結婚のイメージが曖昧。
8	婚活をしている理由は自発的なものか義務的なものか	婚活イベントに、親に言われて来た人は総じて消極的で、発言などに意欲がない。
9	パートナーに求める条件に男女間のギャップはあるのか	年配の男性が若い女性をいつまでも好む傾向がある。
10		女性が家事をするのが当然、といった社会のイメージのすりこみが、男女両方にある。
11		仕事をしている女性は、「仕事の邪魔にならない」男性を求める。
12		40歳代女性の結婚相手に求める年収の条件が、バブル期の感覚から抜け出していない。
13	独身でいる理由は何か	若者は結婚するための条件として必ず「お金」を挙げる。
14		若者にはインターネットなどでの情報のやり取りが普及しているので、まず年収など外側の情報の話になるのではないか。
15	コミュニケーションの不足	婚活イベントでは、わざと参加者の筆記用具を用意せず、参加者同士で貸し借りする「交流」の機会を作っている。
16		婚活イベントでは、自分からアクションしないと結婚にはつながらないので、自発的に「交流」できることを重視している。
17		婚活イベントの後に2回目に会って、それ以後もつきあい続けるのが難しいようだ。

番号	テーマ	実態
18		婚活イベントに何年も出続けている人がいるが、失敗を次に生かせていない。
19		婚活イベントでせっかく話が弾んだのに、イベント後にはもう会わない事例がある。
20		とくに 30 歳代の男性が結婚に向けて動かない傾向にある。
21		30 歳代には、子どもの頃からの積み重ねで、コミュニケーション能力の育っていない人が多くいる。
22		親が、子どもに嫌われたくないため、子どもがいつまでも家にいることを容認してしまう。
23		いわゆる飲みニケーションがなくなるなど、上の世代とお互いの話をしていない。

【1-2 最近の若者の結婚事情を踏まえた対応や意見】

番号	テーマ	対応や意見
1	将来設計と結婚の関係	親の意識も変えて、危機感を持つ必要がある。
2		親が子どもに嫌われなければならない。
3		結婚を施策として進めるのなら、婚活イベントで成立したカップルのその後の進展を追跡する必要がある。
4		個人情報保護の問題に触れずとも、追跡調査は可能。
5		若者に結婚の具体的なイメージを示す必要がある。
6	婚活をしている理由は自発的なものか義務的なものか	イベントをするだけでなく、「交流」させる仕掛けが重要。
7	パートナーに求める条件に男女間のギャップはあるのか	結婚は大変なことであり、やらないといけないことは、やっていかねばならない、という話をする必要がある。
8	コミュニケーションの不足	婚活イベント後にお互いに会っている事例を把握する必要がある。
9		婚活イベントを「2回目以降」のつきあいにつなげる工夫を考える必要がある。
10		1回限りの婚活イベントではなく、最初から複数回を連続してセッティングして、カップルで醸成していくような仕組みづくりが必要。
11		「第2弾」が大事なので、1つの婚活イベントに出席したら、別のイベントを紹介されるような仕組みづくりが必要。

2 最近の若者の子育て事情について

日 時：平成 30 年 11 月 14 日（水）14：30～15：30

場 所：奈良県庁

出席者：県内子育て支援団体関係者 5 名

【2-1 最近の若者の子育て事情】

番号	テーマ	実態
1	父親の育児参画	父親が育休を取って家にいると、妻が夫の昼食を作らないといけない等の状況がある。父親が育休を取る方が、余計妻の負担が増えてしまう現状があるのでは。
2		父親が午後 7 時までに帰宅できると、子どもの入浴などを手伝うことができるが、午後 7 時を過ぎると、母親の子どもの世話の邪魔になることもあり、一段落ついた午後 9 時以降に帰ってきてくれたほうが良いのが現状。
3		母親が里帰りした時、夫の世話をしなくて済むため、ほっとすると聞く。
4		父親が子どもを病院に連れて来ているが、子どもの普段の情報を母親から携帯で教えてもらっている。
5	地域とのつながりの構築	復職することが前提のためかもしれないが、複数の地域子育て支援拠点等を掛け持ちして利用し、他の利用者と距離を置く傾向がある。
6		専業主婦の母親同士、就業している母親同士で話をしたいという要望がある。
7		今の親世代は、子どもの時に小さい子どもと触れ合っていないため、子育ての感覚が分からない。
8		中学生などが子育ての現場を体験すると感動する。
9	夫婦の両親の子育てへの関わり	最近では、子育てに口を出してはいけないということが周知されてきたので、かえって祖父母は遠慮している。
10	子育てに関する悩みの相談	SNS 等の発達により、子育てに関する情報が過多となっており、情報を選ぶことが難しい状況。また、自分の育児と比較をしてしまう。
11		保護者の風潮として、子どもの失敗を嫌い、すぐに結果が出ることを期待する傾向がある。
12		保護者の中に、「子どもは自分の分身」という感覚があり、お人形感覚で着飾らせているが、子どもの普段の状況を答えられない人がいる。
13	母親の就労	積極的に働いて仕事を通じて社会とつながりたい母親がいる。
14		数年間は子どもとつながって育児をしたい母親もいるのに、行政や社会が母親に働くことを求める風潮には問題もある。

番号	テーマ	実態
15		自分は働き、子どもを保育のプロにあずけるほうが、子育てに自信を持てる母親もいる。

【2-2 最近の若者の子育て事情を踏まえた対応や意見】

番号	テーマ	対応や意見
1	父親の育児参画	父親の育休に力を入れていくのではなく、定時退社を保障して父親が子育てに参加するほうが効果的な場合もあるのではないかな。
2		奈良県に住んでいても、勤務先は大阪や京都が多いので、県内の職場での子育て支援だけでは効果が挙がらないのではないかな。
3	地域とのつながりの構築	保護者同士で子育てサークルなどをつくって、今後生活していく地域とのつながりを強めてもらう。
4		地域の中学校などが、つどいの広場などの体験ボランティアを通じて、小さな子どもとふれあう機会を提供する。
5	夫婦の両親の子育てへの関わり	祖父母が古い子育て知識で口を出すことのないように、祖父母世代への子育て知識の周知も必要。
6	子育てに関する悩みの相談	情報過多の状況の中、子育てに正解はないことを分かってもらうため、地域子育て支援拠点等で情報を取捨選択する手助けを行う。
7		保護者が地域子育て支援拠点等を利用することで、色々な子育てのあり方に触れて、育児の方法を学び、自信を持ってもらう。
8		まず支援者と保護者との信頼関係を構築して、相談を引き出すことが必要。
9	母親の就労	行政が母親の就労を推進する際には、母親不在でも父親が子どもの世話ができるよう、父親の育児啓発をセットで実施する必要がある。
10		「女性が輝く社会」のためには、女性にだけ啓発するのではなく、男性側の協力・理解が必要。
11		母親が働き、子どもをあずける場所に行くことが、他の子育て環境を知る機会につながる場合もある。

